





境内の一番良い場所に立つ2体の胸像

本堂脇に立つ2体の胸像

左：小栗上野介

右：栗本鋤雲（じょうん）

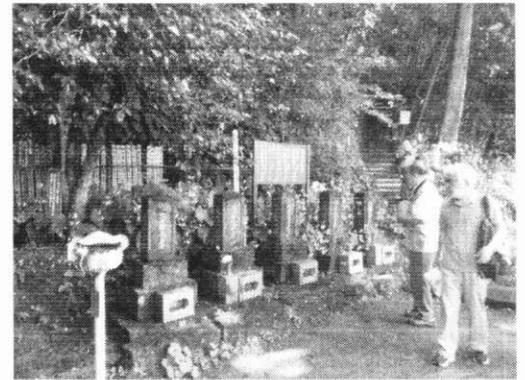
【上野介の胸像】・・・大正11年横須賀海軍工廠に建立されたが戦中の鉄の供出にあう。その時、市ではセメント像建立、昭和27年再び前と同じ胸像を建立。余ったセメント胸像は、ゆかりの地である東善寺に移って来た。

【鋤雲の胸像】・・・横須賀製鉄所建設の功労者、上野介と共に日本近代化に尽力、明治以降報知新聞主幹として活躍

何故、鋤雲の胸像が？ 吉田直（のぶる・元海軍建築局長）は、横須賀製鉄所建設に現場責任者として才覚を振った栗本鋤雲の業績を小栗上野介と並んで顕彰すべきと考え、私費による胸像作成を発案。横須賀市内への設置を働きかけるも当時の市当局の理解を得られず、東善寺境内の小栗上野介胸像の隣に設置することになる。

〔上野介の事情は、皆さんへ説明をしたが、栗本鋤雲の胸像がなぜあるのか、上記の理由は知らなかった。〕

胸像2体の左裏にある「小栗父子」を中心に左右に五基の墓が並ぶ場所は、全員が見学した



墓の前で手を合わせる人やお墓を眺めて考えにふける人など、静まり返った時間が流れた。

1) 中心の小栗父子の墓石

右側 小栗上野介忠順（陽寿院殿法岳浄性居士）四十二歳 左側 小栗又一忠道（本教院殿樹山真松居士）二十一歳

2) 右側の家臣の墓 5基

右から 塚越富五郎（劔越富清居士）二十三歳、佐藤銀十郎（劔佐救清居士）二十一歳、渡辺太三郎（心岩良傳居士）二十歳、大井磯十郎（白岩禅明居士）？ 荒川祐蔵（久山禅長居士）三十六歳（渡辺・大井・荒川の三氏は烏川の水沼河原で上野介と一緒に斬首されました）

3) 左側の家臣の墓 5基

右から 塚本真彦（賢宋良哲居士）三十七歳、沓掛藤五郎（桂翁浄月居士）二十五歳、多田金之助（全翁智性居士）二十歳、 塚本ミツ（實岳貞心大姉）？真彦の母 塚本チカ（戒心善童子）七歳位 真彦の娘

この場所に在る「小栗父子の墓」は実は仮の墓で、遺体が埋葬されている墓は裏山の中腹にあり、この場所から階段が多数あり、三分ほどかかった。息を切らせて頑張った。

# 小栗父子が埋葬されている本当の墓

ここでは、皆さん時間を取ってゆっくりとお参りをしていました。



この場所まで、階段上りをした人は 8 人でした。3 分ほどの階段上りですが、最初は皆さん元気に登っていましたがやはり年には勝てず、最後は息を切らせての墓参となりました。皆さん良く登りました。

この墓には、最初胴体しか埋葬されていませんでした。所謂、「お首級迎え」で有名な館林の法輪寺から首が権田村に戻って来たのは、上野介が斬首されて丸一年たってからです。今はここに首と胴体が一緒になり埋葬されています

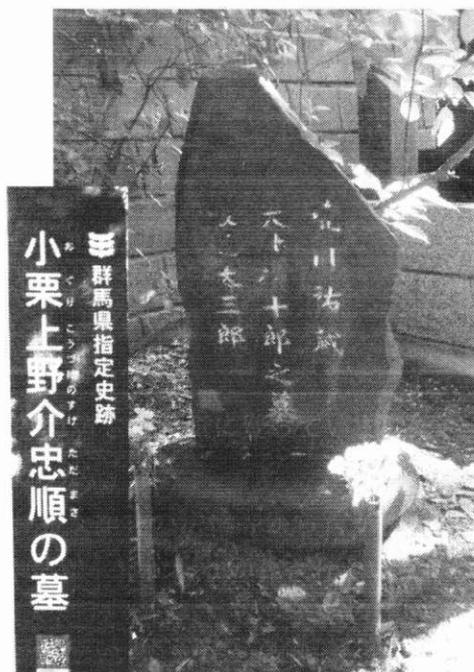
## 〔小栗父子の墓〕

### 両側に立つ三名の墓と石碑



所在地 高崎市會野町権田一六七番地  
指定 昭和二十八年八月二十五日  
高崎市教育委員会

慶応四年（一八六八）閏四月六日朝、小栗上野介忠順は、家臣三名とともに水沼の烏川河原において斬首された。小栗上野介の遺体（胴体）は、村役人池田長左衛門等によりこの場所に埋葬され、その首級は養子又一の首級とともに館林に送られ、東山道鎮撫総督岩倉具定の首実検を受けた後、法輪寺境内に葬られた。のち、中島三左衛門等が首級を奪取し、一周忌当夜、この地に埋葬するに至った。すなわち、ここが小栗公の本墓である。向って右は、上野介とともに斬首された家臣三名の墓である。



群馬県指定史跡  
小栗上野介の首級をすけたたての墓  
小栗上野介忠順の墓

## 小栗上野介首級埋葬処碑

昭和 34 年 4 月 6 日建立

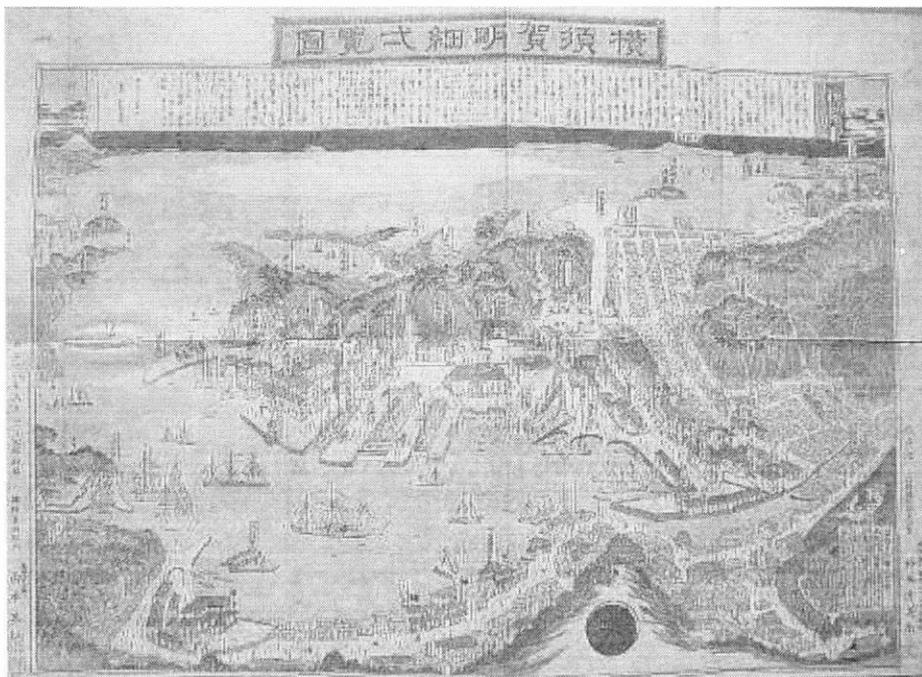
## 〔水沼河原で上野介と一緒に斬首された三名の墓〕

荒川祐藏・・・常陸国出身 遣米使節に随行する  
大井磯十郎・・・権田村出身の家臣  
渡辺太三郎・・・江戸から権田村へ随行して来た

## 本堂内で、村上住職からの講義が始まった。

下見時や、メールのやり取りでは、本堂を自由見学した後、別室での講義だった

急遽、住職が本堂内を案内することになり、まず【東郷平八郎元帥】自筆の書を説明し、次に【横須賀明細式覧図】の説明。



【横須賀明細式覧図】明治 16 年版 この絵図は当時の横須賀製鉄所（造船所）を詳細に描いたもので、ここを訪れた多くの国内外の見学客にお土産品として販売されていたものです。この絵図からは壮大な工場群を見ることが出来る。真に日本の近代化のシンボルとなった場所だった。上野介が建設する前は数十戸のしなびた漁村だったが、十数年で近代的な小都市となった。

1、鉄製品や木工製品、ロープなど船に関わるものを一か所で製作する総合工場が誕生した。

（製綱所（ロープ工場）、製帆所（帆布）、錬鉄所、組立所など）

2、慶應 2 年からは蒸気機関を利用した製品作りが始まる

3、ドック及び諸機械の運転効用を見るために内外を問わず一日数百人規模で横浜から船に乗りやって来た

4、近くには宿屋もあり、宿泊客は朝 8 時から案内人と一緒に施設内を見学した

上記のような話を皆さんで聞きました。

## 『東郷平八郎元帥 自筆の書』 【仁義禮智信】



『この書は、日露戦争で活躍した東郷平八郎元帥が日本海海戦でロシアに勝利できたのは、小栗上野介が横須賀造船所を作ったことで素晴らしい軍艦を日本軍が持つことが出来た事によると、上野介の功績を称え、上野介のひい孫『又一』等を自宅に招き、お礼の一つとして自筆の書【仁義禮智信】を贈った。

仁義禮智信 為小栗又一君 と書かれている。

それが縁あって東善寺に寄贈され、現在は本堂に飾られている』と住職が皆さんに話をされた。

# 【観音山の小栗邸跡を訪ねて】

上野介と妻が普請中の家を確認する為、歩いた山道を辿って

午後からの見学地は、東善寺から約1km東（高崎方面）へ行った【満寿池・ますじゅいけ】の駐車場からです。ここからは、観音山へ登る人と近くにある熊谷直実ゆかりの愛馬【権田栗毛】が持っていた観音様を祀る岩窟観音堂を見学する人に分かれました。



国道から右側へ入る脇道が入口です。道路を100m程登ると右側に入る山道あり

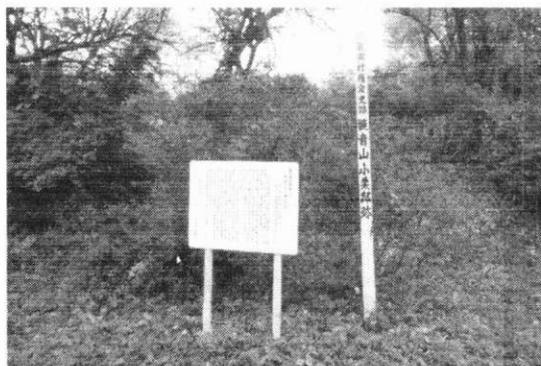
山道は上野介と妻道子が屋敷の進捗状況を確認するために登った道で、そこを私達も当時を偲んで登りました。



険しい山道で急峻な崖になっている



7分ほどで平場に、奥の林が現地です



屋敷跡には標柱と看板があります



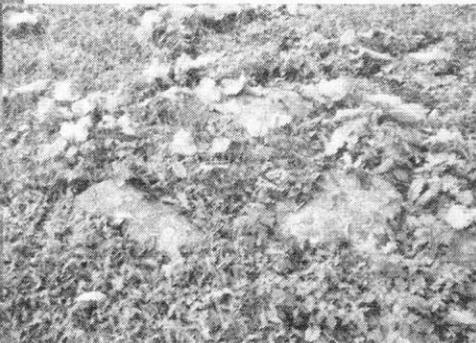
上野介達も眺めた絶景、疲れた体を癒してくれて皆さん十分堪能した

【至誠奉公】の石碑  
題字は田彦根藩主井伊家16代当主の筆による  
小栗邸跡地の上に建てられている



この先は崖になっている

地域の人達が整備しているのか、2回とも綺麗になっていた



広々とした（10間四方）屋敷跡地と

今も残る河原石の礎石（4か所は確認した）上野介が造った【観音山用水】

## 【小高用水】では地元の佐藤さんに大変お世話になりました

下見の時佐藤さんと知り合い、それ以来何度かメールのやり取りをしていました。当日も地元の人ならではの用水に関するお話をさせていただき皆さんも良くわかったと思います。また、缶コーヒーや【ずいき】に自家製梅干しまでお土産に頂きました。大変お世話になりました。

申し訳なかったのは、東善寺での時間オーバーがそのまま継続し、到着が遅れても待っていてくれた事です。

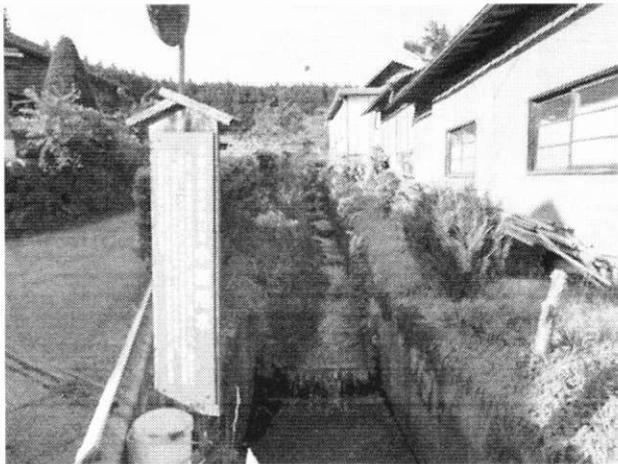


### 《小高用水は、小栗上野介がルート設定し、 地元民が完成させた》

元々小高集落は、田圃を潤すための水に困っていた。その時、小栗上野介が観音山に用水を作ったことを知り、自分達の集落に用水を作って欲しいと上野介に依頼し、ルート作成をしてもらう上野介亡き後は、地元民達で協力し尾根を一つ越えた《稲瀬沢》の水を引くことが出来た（約1kmの用水路）

それ以降は美味しいお米を作ることが出来たと言う。

150年後の今でも小高用水は地元民が交替で管理運営をしている

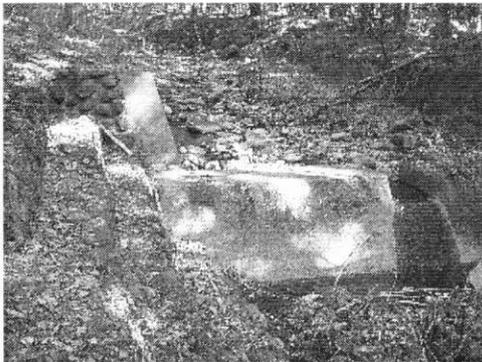


### 《小高用水》・・・ここから下の田圃を潤しています

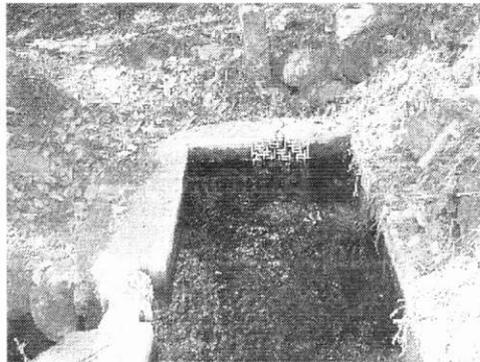
観光用としての小高用水は写真にある部分だけですが、実際はここから裏にある山を一つ越えた《稲瀬沢》から水を引いています。（下記写真）

小高用水は何時でも水が枯れることが無いと言うことです。それは戦後、この上に広がる田圃の水を得る為、別の用水も造ったそうです。それが小高用水と合流する為水量が豊富になったそうです。（佐藤さんの話）

下記3枚の写真を使い、佐藤さんから現在用水管理の話聞いた



稲瀬沢の取り入れ口 大きな杉の林にある。昔は石でせきとめただけのものだった。ここから左のパイプ（地中）に導かれる。



砂溜り（沈砂池） まずいったん水に混じる砂をここで沈めて水だけにし、落葉などのゴミも金網で防ぐ。ゴミ取りは取り入れ口と、ここと、



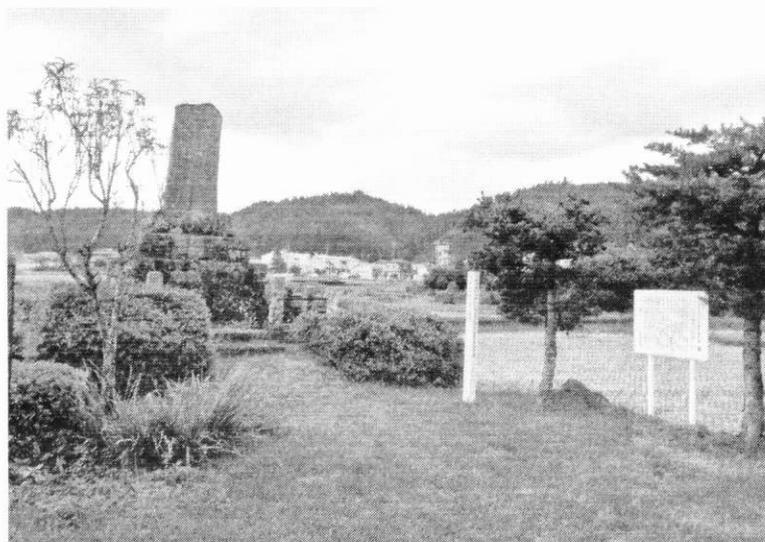
ゴミ枡（ます） 砂溜りの次にもう一回ここでゴミを最終チェックする。ふだんはフタをしています。このまま飲めるいい水です。

《前もって佐藤さんと当日の打ち合わせをした時点で、佐藤さんから稲瀬沢の取入れ口まで車で案内すると提案がありましたが、片道15分かかると言われ写真での説明になりました》

# 最後に訪れた《小栗上野介終焉の地》石碑



最後に訪れたのが、倉淵町三ノ倉にある【小栗上野介終焉の地】石碑 予定よりだいぶ遅くなってしまい皆さんもお疲れの様子。それでも何とか石碑の廻りを歩いて石碑に書かれている寄附者の名前などを良く観察していた。流石、史談会の会員だ。石碑のある場所は、実際に上野介と家臣3名が斬首された川原でなく、土手の傍にある田んぼの中に造られている。3名家臣は、荒川祐蔵・大井磯十郎・渡辺太郎です。



「偉人小栗上野介罪なくして此所に斬らる」と彫られた顕彰慰霊碑が立ち、終焉の地であることを示している。碑文は『維新前後の政争と小栗上野介の死』の著者蜷川新氏の書です。建立者は旧倉田村と鳥淵村の両村民有志による。建立年は昭和7年（1932）

小栗上野介終焉の地に建つ石碑と看板や標柱等



推定ですが、赤囲みの部分が小栗上野介と3人の家臣が斬首された場所か？

